

**JLTA Newsletter No. 31**  
**日本語テスト学会**  
**The Japan Language Testing Association**

JLTA Newsletter No. 31 発行代表者:浪田克之介 2011年(平成23年)6月1日発行  
発行所:日本語テスト学会(JLTA)事務局  
〒389-0813 長野県千曲市若宮 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970  
e-mail: [youichi@avis.ne.jp](mailto:youichi@avis.ne.jp) URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

**学会の役割**

**会長 浪田克之介**

本学会が言語テストを主たる研究対象とする専門学会として発足してまもなく15周年を迎える。これまで、全国研究大会、研究会、そして学会紀要などにおける会員諸氏の積極的な活動が学会としての存在意義を大いに高めてきた。加えて研究発表者や基調講演者の海外からの参加や招聘、また英文の紀要論文の増加で、その貢献は国内のみならず、広く海外にまで及んでいる。海外との交流では、近年はLTRCやAILAをはじめとする国際学会で発表する会員が増えてきている。また海外の評価が高い出版社からの著書の刊行や国際誌への投稿もまれではない。本学会が2006年に制定した「テストの実施規範」はILTAがその後定めた“Guidelines for Practice”に活用されている。またILTAの役員に選出されて活躍している本学会の会員もいる。

上述の国内外で本学会が果たしてきた役割は大きい、なお付け加えたいことがある。

この3月に発表された看護師国家試験では、外国人看護師候補者の合格率は4%だった。昨年度(1.2%)に比べ若干上昇したものの、依然として低い。一方、全体の合格率は91.2%だった。厚労省は今回から「言葉の壁」に配慮し、英語を併記したり、難解な漢字に振り仮名を付けるなどの対策を講じたとのことである。しかし、出題改善のため設置された委員会は用語検討のため、テストの専門家は入っていなかった。本学会などがもつ知見が活用されていないことは残念である。海外からの移住者に頼ることが多いカナダでは、看護師のための言語テストが医療関係と言語テストの専門家によって共同で作成されていることはわが国でも参考になるであろう。その点で、いわゆる全国学力テストの今後の実施に関わって文部科学省が設置した「専門家会議」に、本学会の会員が参画したことは意義あることである。私どもの努力が広く社会に還元されることが望ましい。

## 2010 年度研究例会報告

2010 年 11 月 6 日(土)

於：慶應義塾大学日吉キャンパス

各々の発表について、以下に報告を記載致します。

会場校の中村優治先生、お世話になりました。

(事務局, 広報委員会)

### 研究発表

#### わが国における言語テストの社会的位置づけ～テスト分析者から見た現状と課題～

光永悠彦 (東京工業大学大学院)

光永氏の講演は、自己紹介を兼ねてテスト分析者として過去の試験データの管理や分析に関わった経験談から始まった。

まず、大規模言語テスト実施の計画から実行までを「日本留学試験」を例にとって説明した。そして、テストを実施する際の苦労は作成段階にあり、テストの専門家によるアドバイスが不可欠であると指摘した。

また、複数のフォームが存在する場合、受験者がどのフォームを受験しても、どの実施回を受験しても、結果が比較可能になるような得点を返す必要があると、等化の必要性を強調した。そして、結果が比較可能になるような理論的な根拠を示すために、そのデータの特徴を最もよく表すモデルに当てはめ、そのモデル(古典的テスト理論や項目反応理論)の上で議論を行うことになるという。等化には、能力値には絶対的な意味がないので、解釈するのに都合がよい尺度得点に

変換して受験者に返すことができるという利点にも言及した。

慶應義塾大学における実践については、等化の導入によりプレースメントテストと確認テストとの比較、基準集団と各プレースメントテストとの比較が可能となり、新入生の文法・語彙の能力値に殆ど変化はなかったが、読解の能力値は上昇したことや、近年の入学者の読解能力が向上する傾向にあるという結果を報告した。

さらにまた、「よりよい」言語テストとするためには、プリテストを実施して項目の特性を事前に知ること、何を測定しているかを先に定義すること、Can-do statements などを用いて得点に意味をもたせる、などの具体的な方策を提示した。

時間が足りなくて質疑応答ができなかったのが残念だったが、氏の熱弁に「科学的にもっともらしい」テストづくりへの真摯な態度を感じた。

報告者 島田勝正  
(桃山学院大学)

#### エッセイライティングに及ぼす教室外学習の効果検証

宮崎 啓 (慶應義塾高等学校)

本発表は、大学付属高等学校において、生徒たちの英語エッセイライティングの能力に与える要因を、教室外の学習活動から探ろうとした研究の報告である。様々な教室外学習方法を問う「自習学習に関するアンケート」を行った結果と、2種類のライティングテストでの評価との相関から、①ライティング力育成は教室内のみでは不十分である、②言語面の育成には和文英訳や英文法の学習が効果的である、③修辞面の育成には要約練習や日本語(母語)による読書が有効であるといった結論が導き出された。

発表を拝聴し、研究デザインとして非常に参考になるものであったただけでな

く、結果にたいへん有用性があると感じた。高校・大学の教員をはじめ高校生一般あるいは保護者の方々に広くこの研究結果を知ってもらうことによって、今後の高校生の英語学習における大きな指標とすることが可能であろう。つまり、第二言語教育でよく言われる「母語力」が外国語学習の成果につながるということや、文法学習が英語力向上のためには無駄になることがないという事実の裏付けとして、生徒たち自身や保護者の方々に実感していただけるのではないだろうか。

専門的な研究会での報告にとどまらず、一般的に理解されやすい形に変換しての周知が期待される発表であった。

報告者 稲熊美保  
(清泉女子大学)

## スローラーナーへのライティング指導と評価 — 自律した書き手になるための第一歩

馬場千秋 (帝京科学大学)

本発表では、英語学習に対しての意欲や自信を喪失している「スローラーナー」へのライティング指導について言及した。

スローラーナーがライティング活動を行う場合、「何をどのように書いたらいいのかわからない」という問題が生じる。想像力と創造力の双方が欠如しているため、課題を課しても、思考回路が停止し、1~2文で書きたい内容が終わってしまう。また、語彙力、文法力がないために、10語~20語程度の分量で、エラーが散見される英文が並ぶ。

このような学習者には、自分自身のことについて英語で表現させる機会を持たせ、自ら何かを考え、最終的に「自分にもできた」という自信を持たせる機会を設ける必要がある。また、中には「今までずっと教員に無視されてきた」と考えているので、ライティング活動におけ

るフィードバックや授業中の巡回指導を通じて、教員と学習者のラポール作りをしながら、指導を行い、「自分を見ていてくれる教員がいる」という気持ちを持たせることも大切である。

指導の具体例として、単独短文での練習、3文によるライティング、論理展開を意識した指導、モデルやQ-Aを用いた指導、さらに四コマ漫画や映像のdescriptionや自由英作文についても言及した。指導例の詳細は、馬場(2010)「英語表現とライティング指導」『英語教育』第59巻第3号、pp. 36-39 (大修館書店) 他でも紹介しているので、参照されたい。

さらに、初級学習者への半年間指導における変化の分析結果およびTOEICスコア470以下を初級、470以上を中級とし、エラー数や語数等における違いを分析した結果を報告した。これらの結果から、初級学習者から中級学習者へのステップとして、課題内で学習者が使用している文法項目の増加とエラーの減少および語数の安定が指摘された。

最後にライティングの評価基準について取り上げた。既存の評価基準は、初級学習者向けではないため、初級学習者の微々たるライティング力の変化を見ることができると評価基準の開発が必要であることを示唆した。

報告者 馬場千秋  
(帝京科学大学)

## ライティングの評価トレーニングが授業改善にもたらすもの~FDの視点から 松本佳穂子 (東海大学)

T大学で、フェアでかつ学生を次の段階に押し上げることができる評価を目指し、開発された新カリキュラムが、今年パイロットとして実施された。

新カリキュラムは以下の3つのキーワードに基づいている。

1. can do statement に基づく教育  
評価指標  
CEFR(ヨーロッパ共通参照枠)とT大学の必修英語教育の現状とニーズを考え合わせて独自の目標とルーブリックを作成した。
2. PDCAによるself-reflection  
PDCAとは、plan, do, check, and actionのことであり、カリキュラム、授業、学生という3つのレベルで、計画し、実行し、見直し、修正するというものを行った。
3. カリキュラム開発に連動するFD  
カリキュラム開発に際して、アンケート調査などさまざまな局面で、教員を巻き込んでいった。

さらに、FDの一環として、授業改善を目指したライティングの評価トレーニングを、2009年秋学期から2010年春学期にかけて、数回実施した。その結果inter-rater reliabilityがよくなってきたが、学生の自己評価と教員の評価を比べると、教員と項目により、ばらつきがあることがわかった。特に教員のファクターが大きいということもわかった。

これらのことから、評価トレーニングは、以下の3つの側面において授業改善に繋がると考えられる。

1. カリキュラムとしては、目標→授業→評価という一貫性が実践的に実現される。
2. 教師個人としては、指導・評価を客観的に見直すことにより、実践の改善に繋がる。
3. 学生にとっては、目標と評価基準がより明確に具体的に示され、わかりやすい授業になる。

報告者 正木美知子  
(大阪国際大学)

## 海外の学会・研究会 参加報告

### ACTFL 年次大会 報告

報告者 長沼君主 (東京外国語大学)

研究会名 ACTFL Annual Convention  
開催日 2010年11月19日-21日  
開催場所 Hynes Convention Center, Boston,  
MA, USA

### ACTFL 年次大会視察

東京外国語大学英語学習支援センター(English Learning Center)では、GP指定を受けて、現在、「英語学習支援・評価システム連環プログラム」の開発を進めており、その一環として、ライティング/スピーキング評価研究やヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)に準拠した言語パスポート(Language Passport)の発行を行っている。

GPにおける海外視察先としては、CEFR以外のスタンダードやフレームワーク開発の最新動向を押さえることを目的としていたことから、カナダのCanadian Language BenchmarksやオーストラリアのAustralian Language Levels (ALL) Guidelineも検討を行ったが、日程的にもちょうど学園祭期間にあたっており、1週間まるまる授業がないことも後押しし、ACTFL年次大会への参加を決めた。

アメリカには他にAAALやTESOLなどの学会もあったが、ACTFL Proficiency GuidelinesやStandards for Foreign Language Learning in the 21st Centuryなどの情報を得るにはACTFLはちょうど訪れておきたい学会でもあった。開催地のボストンは学部時代に短期語学研修で6週間ほど滞在して以来であり、ひさしぶりにニューイングランド地方のどこか懐かしい情景にひたり、感慨を覚える視察となった。

## ACTFL ライティングワークショップ

ACTFL への視察の目的の1つは、ヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP) のコンセプトを踏襲し、現在、アメリカにおいて開発が進められている LinguaFolio についての知見を得ることにあったが、もう1つには ACTFL の年次大会に先駆けて行われるワークショップのうち、ACTFL Writing Proficiency Guidelines Familiarization Workshop に参加することになった。

ACTFL と言えば、Speaking Guidelines に基づいた OPI (Oral Proficiency Interviews) が有名であるが、同様に WPT (Writing Proficiency Test) も開発されている。英語学習支援センターではこれまで ACTFL OPI の下位レベルを拡張し、日本人に合わせて開発された ALC SST の評価官トレーニングを受講するなど、スピーキング評価研究を行って来ており、ライティング評価についても示唆を得るべく、同僚とともに前日入りした。

ワークショップへの参加は基本的に OPI のトレーニングを受けていることを前提としており、これは学会全体を通して感じたことでもあるが、お膝元の学会であることもあり、非常によく ACTFL のレベルが浸透している印象を受けた。参加者は主に母語話者の教員であり、我々のようなケースは例外であった。ワークショップでは、Speaking と対比しながら、Writing Guidelines の特徴に習熟することに始まり、実際の答案の評価を行った他、タスクのプロンプトのレベルについても判定を行った。

WPT も OPI と同じく floor や ceiling の考えに基づいて判定を行っており、その意味でタスクのレベルを正確に判断することが重要となる。ただし、スピーキングとは異なり、動的に質問を行うなどして、タスクの難易度の微調整を行うことができない点が、ライティング評価の難しさであり、評価がタスクの機能やテキストタイプに依存する点は、常に意識する必要があることが議論された。

## LinguaFolio プロジェクト

LinguaFolio は ELP と同様に言語ポートや自己評価チェックリストなどほぼ同一の要素から構成されるが、背後のフレームワークとして、CEFR ではなく、ACTFL Proficiency Guidelines に基づいたレベル記述を行っている点で異なる。開発の中心となっているのは、ヴァージニア州、ケンタッキー州、サウスカロライナ州、ノースカロライナ州、ジョージア州のパイロット研究を行った5州に加えて、5年間の縦断研究を行ったネブラスカ州であり、学会でもこれらの州の代表が中心となり、発表を行っていた。

LinguaFolio プロジェクトは2005年にスタートし、2010年7月によりやく改訂版が完成となったばかりであり、今回の学会が、ほぼ公の場での初お目見えとあり、多くの注目を集めていた。開発は州代表の集まる言語教育に関する評議会である NCSSFL の主導で行なわれており、現会長はサウスカロライナ州、前会長はケンタッキー州から選出され、研究の推進役となっていた。アメリカではドイツ語教育学会で積極的に CEFR の紹介が行われており、開発にあたってはドイツへの視察を行ったとのことだった。

LinguaFolio Online はオレゴン大学の CASLS が開発を行っており、当日もデモが行われたが、EVIDENCE と呼ばれる学習者が自らの能力を示す証拠をアップロードできるところに特徴がある。また、エジンバラ大学の Michael Byram の理論的枠組みをもとにして異文化遭遇体験 (ENCOUNTER) を記述できるようにもなっている。アメリカの日本語教師会の知り合いにもたまたま出会ったが、日本の国際交流基金で開発された JF 日本語教育スタンダードに基づいた「みんなの「Can-do」サイト」が教師のものであるのに対して、完全に学習者のものであり、管理画面などはないようであった。ヨーロッパの動きと比べても、よりオンライン版の開発に力がそそがれていた。

## CEFR の受容と広まり

学会ではその他、CEFR の紹介を行うセッションや ILR や ACTFL のフレームワークとの比較を行うセッションなどもあり、CEFR へ多くの関心が寄せられている様子であった。実際、ACTFL CEFR Alignment Conference が 2010 年の 6 月末にライブツイッヒで開催され、関連諸機関の代表者間での対話が始まったようであった。その会合での結論は、テストをリンクすることはできるが、フレームワークをつなぐことはできないとのことであった。会合は今年の夏にも行われる予定とのことであり、今後の動向が注目される。

余談であるが、ACTFL Proficiency Guidelines はリーディングとリスニングの改訂が行われており、ライティングとリスニングでも Superior のさらに上に Distinguished レベルをつけ加えることが検討されているとのことであった。CEFR でも D レベルの必要性が示唆されており、English Profile では C レベルについて記述した書籍が刊行される予定である。高度言語力をどのように記述していくかも今後の課題であろう。

## English Profile セミナー 報告 報告者 長沼君主 (東京外国語大学)

研究会名 English Profile Network Seminar  
開催日 2011 年 2 月 10 日 - 11 日  
開催場所 University Centre, Cambridge, UK

## English Profile ネットワークセミナー

ヨーロッパ共通言語参照枠 (CEFR) は個別言語の文法や語彙記述を行っておらず、それを補完するものとしてドイツ語では Profile Deutsch が開発されるなどしている。英語においても Cambridge ESOL を中心として English Profile を開発中であり、ケンブリッジ英検の学習者コーパスデータの分析に加えて、各国からライティングデータやスピーキングデータが集められ、分析されている。

東京外国語大学英語学習支援センター (English Learning Center) でも、2008 年度のパイロット調査の段階からデータコレクションに参加しており、これまで 2009 年度、2010 年度とライティングデータの収集を行い、CEFR の基準に基づいたライティング評価研究を進めている。English Profile ネットワークセミナーへは 2009 年度のケンブリッジ、2010 年度のマドリッド・セミナーに続いて、3 回目の参加となったが、今回は東京外国語大学での新規ライティングタスク開発のパイロット調査の報告で登壇する機会もあった。

English Profile Programme では複数のプロジェクトが進行中であり、セミナーでは毎回その最新成果が発表されている。今年度は残念ながら不参加であったが、昨年度のケンブリッジ・セミナーでは CEFR の父と称される John Trim も参加しており、開会のスピーチを行った。かなりの高齢となるはずであるが、頭脳は依然として明晰であり、イギリスとヨーロッパではレベルの受け取られ方が異なるとの警句を唱えていた。レベルというとフラットなイメージが付きまわってしまい、現実の能力の持つ様々に異なる profile の様相をとらえることが難しくなる。English Profile の開発の目的は、レベルをならし、認定することではなく、個人の profile を記述することにこそあるだろう。

## English Profile プログラム

English Profile では学習者コーパスに基づいて CEFR の各レベルを弁別する基準特性 (criterial features) を特定することが主な作業となり、その成果は Vocabulary Profile と Grammar Profile へとまとめられつつある。語彙プロファイルは Annette Capel を中心として開発されているが、English Profile の公式サイト ([www.englishprofile.org](http://www.englishprofile.org)) に部分的に公開されており、4 月に C1、C2 レベルが加わったところである。

English Vocabulary Profile では、語義ごとにレベルを特定していることに特徴があり、例えば、know を例にとると、A1 では have/ask for info であったのが、A2 では be able/certain、B1 では be familiar with と語義が広がっていく。また、熟語なども同様にレベルづけがされており、B1 では get to know や as you know、B2 では as far as I know、know better、you never know、C1 では before you know it、know sth inside out などが加わる。さらには、C2 になると、should have known が使いこなせるようになるなど、産出語彙の語義レベルが示されるとともに、実際に学習者が作文したサンプルも載せられている。また、Word of the Week として、特徴的な語彙も取り上げられている。

文法プロファイルについては、John Hawkins を中心として開発されており、近日中にモノグラフとして出版される予定である。モノグラフとしては、他にも Tony Green が C レベルの特徴をまとめている。これは T シリーズと呼ばれる Threshold (B1)、Waystage (A2)、Vantage (B2) を補完するものであり、高度言語能力における機能を分析している。ちなみに、Breakthrough (A1) についても、John Trim が以前にまとめたものが、電子ファイルとして公開されている。なお、他の T シリーズの書籍についても PDF ファイルが無償公開されている。

こうした研究成果については、先日発行されたオンラインジャーナルである English Profile Journal に掲載される他にも、Cambridge ESOL の Research Notes にも関連論文が掲載されており、情報を得ることができる。English Profile Programme では基準特性を用いた機械採点による評価も研究されているが、まだこれからであり、ライティングとスピーキングデータの比較分析や学習者母語の影響など興味は尽きない。東京外国語大学のデータも分析を行い、順次公表をしていきたい。

## Language Testing Forum 30 周年記念 研究大会 報告

報告者 渡部良典 (上智大学)  
Yoshinori Watanabe  
(Sophia University)

研究会名 Language Testing Forum  
開催日 2010 年 11 月 19 日 - 21 日  
開催場所 Lancaster University  
LA1 4YT, UK

### L T F 30 周年

30 年前の 1980 年 10 月 Language Testing Forum (LTF) という参加者 7 名の小さな研究会が英国ランカスター大学で開催された。参加者は Keith Morrow、Cyril J. Weir、Alan Moller、J. C. Alderson、B. J. Carroll、C. Clapham、C. Cripser、I. Seaton。後にその成果は *ELT Documents 111: Issues in Language Testing* (Alderson & Hughes 編、British Council より出版) と結実し 1981 年に出版された。さらにこの研究会は年を重ねその後も、*Language Testing Newsletter*、*Language Testing Update* というように着実に目に見える形で成果を上げてきた。現在言語テストの分野では最も権威のある学術誌 *Language Testing* も淵源はこの L T F にあるということを知る人は少ないかもしれない。

時は移り 2010 年 11 月 19 日、L T F の 30 周年記念大会が、*Issues in Language Testing Revisited* をテーマに同じ場所英国ランカスター大学で開催された。発足当時 7 名だった参加者が今回は 80 名。この 30 年の間に同士は 10 倍を超える人数となった。言語テスト研究はこの 30 年でかくも多くの研究者や学生の関心をよぶようになってきており、本研究会がそれだけ貢献してきたことの証左でもある。

### テスト実践におけるハイテク

第 1 日目は夕刻から会議が始まり、Scott Windeatt (*Newcastle University*)

が“Computer-based language testing: the final frontier?”というタイトルで講演。自動文字起装置 (automatic transcriber) の紹介や3Dを使った航空管理官の英語能力検定などの紹介があり、私は今まで見たことのないデモンストレーションであり大変面白くなる内容であった。技術的にはおそらく日本が格段に進歩していると思う。しかしそれを教育実践に生かして教育を実地に近づけ面白くするというような応用というのは基礎研究とは独立して発展するよう思われた。その後は記念のパーティー兼夕食会でその日はお開き。パーティー会場にはPearsonの方が多く来ており、私のテーブルはほとんどがその関係者だった。PTE アカデミックをいろいろな機会にプロモーションしようとしている様子が伺われた。

## テスト研究の歴史

第2日目はAlan Daviesの講演で幕を開け、引き続き6編の研究発表と2本のシンポジウムが行われた。シンポジウムに続いて3編の発表、次に2本目のシンポジウム、それに引き続いて3編の研究発表という、あきさせない構成になっていた。Daviesの講演はテスト研究の歴史であり、またそれに引き続くシンポジウム1のテーマはGeneral language proficiency。Lynda Taylorの歴史語りに始まった。Daviesはテストの研究を政治的な状況も含めた歴史の流れに位置づけるという語り口だったのに対し、Taylorの方は英語教員から始まってテスト研究を始めるに至った経緯を写真入りで紹介するというものだった。シンポジウム1のもう1人の発表者はJohn de Jong。最近はおっぱらPearson Test of English (PTE)に係ってきたという経緯もあるのだろう、今回もまたPTEアカデミックのプロモーションのような発表だった。Taylorとde Jongの取り合わせはややちぐはぐな印象を受けたが、終わってみれば前者は定性的なアプロ

ーチ、後者は定量的なアプローチということでそれなりにまとまっていたと思う。

シンポジウム2はCommunicative language testingをテーマに、Cyril WeirとCathy Taylor & Dianne Wallが発表者。Weirは盛んにcognitive validityの重要性を強調しており、かなり認知心理学に傾倒しているなという印象を受けた。簡単に言えばテストにおける言語運用の認知プロセスは実際の言語使用場面における言語運用の認知プロセスと同じかどうかを検証するというものである。Bachman & Palmerのinteractivenessという概念に大変近い考え方だと思う。またTaylor & Wallはスピーキング・テストで言語能力を測定する試みの紹介だったが、これもダイナミック・テストの考え方はかなり近い。このように、すでに北米で理論的な考察や実証研究が行われているのに、それに触れずに独立した研究が行われているように思う。

## 認知心理学と診断テスト

今回の研究会では認知心理学が大変関心を呼んでいるのが意外であった。この日行われた6編の研究発表も心理学科に所属する博士課程の学生による診断テストに関する発表などがいくつかあり、大変刺激的であった。Aldersonも言語テストには認知心理学の成果を採り入れるべきだと主張しながら、これらの研究を大変高く評価しており、なるほど診断テストは1つの重要な流れを作りつつあるなという印象を受けた。

3日目は1つのシンポジウムと3編の研究発表があった。シンポジウムではLanguage for specific purposesをテーマに、最初はHenry Emery (*emery-roberts Aviation English Consultants*)が航空管制官の英語テストについて実践的な例をあげながら大変興味深い話をしていった。Aldersonはここ5年ほどこの方面でも研究を進め



ているが、以前 BBC の放送で「パイロットの発話能力が問題なのではなく、管制官の発話が問題で事故が起こることが多いのだ」というような発言をしていたことを、Emery の話を聞きながら思い起こしていた。なるほど言語は人命を左右するほど重要な要因になりうるのだなということを実感できる発表だった。

### LSP と LGP の理論化

シンポジウムの第二の討論者 Barry O' Sullivan は今回の研究会では話のうまさときれ味の鋭さで異彩を放っていた。LSP (Language for Specific Purposes) と LGP (Language for General Purposes) の関係を理論化し、実際のテスト開発にはどのような意義があるかということ非常にわかりやすい例を引きながら解説をしていたが、あれほど面白くそして綺麗に論理的に組み立てた考え方は初めて耳にした。これからのテスト研究の中心として牽引してゆく研究者になるのではないかなと予感させるものであった。いずれどこかに論文や著書として公になるようだが楽しみである。研究発表 3 編も大変刺激的であった。中でも Bachman & Palmer の枠組みを援用した Fred S. Wu の通訳能力システムの話が面白かった。テストには全くの素人だと謙遜していたが、むしろ素人のほうが面白い研究ができるのかもしれないなどと思わせるようなできばえのよさであった。

### 英国テスト研究の伝統の特徴

今回あらためて英国のテスト研究と北米のテスト研究の違いを感じた。異なっていたことが研究されているということではないので、違いというのは正しい言い方ではないのかもしれない。学術誌や国際学会などを通して情報はほとんどリアルタイムで交換されており、日本でも韓国でも北米でも豪州でもそして英国でも欧州でもその他世界中どこでも同じような研究は行われている。根本的

な捉え方に違いが見られるというのが正しい言い方かもしれない。たとえば、今回の研究大会全体を通して何度も繰り返して参照されていたのが、Keith Morrow (本人も参加していた。) の論文 Communicative language testing: Revolution or evolution? であり、この中の Reliability subject to face validity. というフレーズが何度となく繰り返されていた。北米の研究者についても触れられることはもちろん少なからずあった。特に頻度が高かったのは、Canale & Swain、Chalhoub-Deville、Bachman & Palmer、Michael Kane 等であったが、ほとんどが批判のために引き合いにだされており、理論や実践を組み立ててゆくための基盤にしてゆこうということではない。

ランカスターの博士課程で論文を書いていた時に Alderson の指導を受けながらつくづく思ったことであるが、頭で考え抜いた理論は全く評価されない。モデルというのは現実を単純化したものだが、私が波及効果のモデルを作って (得意になって) 発表したときには、主査の Alderson から副査の Dick Allwright から Rosamond Mitchell から全く評価されなかった。"Reality is much more complex..." といわれるのである。いくら綺麗に結果を描いてもそれが実世界に直接むすびつかなければ評価されない。Morrow の言う face validity は今で言う ecological validity に近いのではないだろうか。つまり現実界との整合性である。あるいは一般化よりも個別への対応といっても良いかもしれない。これは David Hume や John Locke などの経験論の哲学の流れにあるのだと思う。言語学では当初より competence と performance の区別を認めなかった (もちろん E-language も I-language も関心の対象にはないであろう) M. A. K. Halliday の機能言語学と師匠であり民族学と深く結びつく言語学の先駆けとなった J. R. Firth とい

えるだろう。北米とくに米国においては理論的な首尾一貫性を追求する。その立場とは相容れないところが多々あると思う。伝統を守りそれをいつくしむというのは尊敬すべき特質である。外国語としての英語教育におけるテストから出立し、実用性を中心にそえて、使えるテストを理論化する、どこまでも使えるかどうかを問題としながら突き進めて行くという立場である。

### 日本におけるテスト研究の今後

日本では優秀な研究者が *Language Testing* や *Language Assessment Quarterly* その他の海外の研究誌にすぐれた研究を多く発表するようになってきた。彼らは日頃から研鑽を積みながら日頃の生活を送るとともに教育や研究を怠らない。今回の事例からいままさら私見を述べる立場にはないようにも思われる。しかしたまに日頃と異なる環境でしかも刺激的な環境に身をおくと、自然と自らに考えが及ぶものだ。以下は現地でメモをした思いのまとめである。あえて日本におかれた研究者としてどのような貢献ができるのかを考えてみたい。

第一に、IT および機器を使ったテストの実践および研究である。先に紹介したが、第一日目のセッションでは Scott Windeatt が音声認識のソフト等をいくつか紹介していたが、始めてみるものばかりであった。Barry O' Sullivan に聞いたところによると、このようなソフトを開発している会社が横浜(とそしてどこだったか他に一箇所)にあるということだ。恥ずかしい話だが、自分の国の世界に誇るべき成果を海外の人に教えてもらうこととなった。国際学会で研究発表をするからには単なるデモでは受理されない。しかしどのようなソフトもいいのでなんとかテスト理論の枠組みに当てはめて LTRC などにどんどん応募し、是非日本の実践技術を世界に広めてもいいのではないかと思う。

第二に、英語以外のテスト開発と研究である。LTF は完全に英国中心である。すなわち英語が対象言語であることが当然の前提である。唯一例外は John de Jong のオランダ語テストの開発について触れたことであったが、それとても会場からの質問に対する応答の一部で単に触れられただけに過ぎない。CEFR は多言語を対象としているとはいえ、やはり英語が中心である。今後は中国語の学習者が増えることが予想されるが、今のところテスト研究が進んでいる様子はない。しかし日本語はかなり進んでいる。あたかも Chomsky が言語理論を構築する際に英語を深めることによって枠組みを構築しはじめたように、つきつめて研究を行い、どの言語にも共通する普遍的な言語テスト理論を構築することができればすばらしいことだと思う。そしてその可能性は十二分にあると思う。

第三に、テストの実践例を真摯な研究の対象にすることである。先にも述べたが北米のテスト研究に影響を受けすぎるとともかく理論に偏りがちである。理論を理解するだけで精一杯、オリジナリティーの全くない面白みのない研究ばかりがでてくる。現在は Messick, Kane, Chapelle の妥当性は当然の理解事項になっている。あらたに勉強をせざるを得ない。しかし、これは一回理解すればそれですむことである。彼らの理論を批判的に検討したいなどという場合は別だが、時間をかけてじっくり研究するといった性質のものではない。LTF では Michael Kane の argument-based approach to validity も CEFR ですらも話題になることこそあれ、金科玉条として捉えられるなどということは一切なかった。同様に、分析方法についても、項目応答理論、EFC、DIF、SEM、G-theory などは常識である。しかし、これらについてすべてにわたって理解するといったことをすればおそらくそれが終わらないうちに定年を迎え研究者としての生涯を終えることになるだろう。自分の

本当に関心のあるテーマは何なのかこれについてデータを集め分析する、これが基本である。そしてこのような態度が研究者としての謙虚さを生み、そして他の研究者への尊敬に繋がるのだと思う。第四に、これは第三点と関係があるのだが、わが国の理論と実践の歴史をまとめる必要があると思う。そしてそれを英語で出版しなければならない。日本には数多のテストが作られ実施されているのに、それについての報告があまりにも少ない。公にされている情報の質と量で言えばセンター入試は例外的に多い。しかしそれとてもほぼすべてが日本語で書かれているので日本語のわからない研究者には情報を得る手段がない。今回は英国中心の英国のためのテスト研究の方向付けということだったので、普遍性が話題にならなかったのは残念であったがいたし方ないだろう。Constant Leung が唯一のアジア系研究者であったが、彼はロンドン大学の教員なのでアジアを代表しているとはいえない。その中で唯一日本の研究者として引用されていたのは宮崎一定と彼の著書『科挙』であった。引用されたのは Yale 大学出版局からでてくる英語版である。一昨年 Denver で開催された LTRC でも引用されていたのは（引用者は Lynda Taylor）大友賢二先生の LAQ に掲載されたインタビュー記事の歴史的なコメントに関してであった。

それにしても、このような欧米の研究会に出席していつもため息がでるほどうらやましく思うのは、異なる意見を言うことが重用されることである。同じことを言うことには意義が認められない。議論が大変大きな役割を果たしており、議論によってセッションが進んでゆく。議論なしには何も成り立たない。われと我が身を省みながらその思いを新たにした。

※ 本研究大会に関心のある方は次の URL をご覧ください。冒頭で紹介

した *ELT Documents 111: Issues in Language Testing* も全部ダウンロードできるようになっています。

<http://www.ling.lancs.ac.uk/groups/ltrg/ltf2010.htm>

※ 今回の訪英は文部科学省科学研究助成金 20520521 により可能となったものである。

## アメリカ応用言語学会 2011 シカゴ大会での発表を終えて

報告者 笠原究(北海道教育大学)

学会大会名 The American Association for Applied Linguistics (AAAL)  
2011 Annual Conference

開催日 2011年3月26日-29日

開催場所 Sheraton Chicago Hotel and Towers  
Chicago, Illinois, USA

初めて海外学会で発表する場合、普通はかなり緊張するものであろう。しかし私の場合は、奈良教育大学の佐藤先生、愛知教育大学の建内先生という百戦錬磨の方々と同行させていただいたおかげで、割とリラックスしてシカゴ入りすることができた。

“Windy City”の名の通り、シカゴの寒さは身に堪えた。普段は北海道の旭川市という酷寒の地に住んでおり、3月下旬という時期から判断して、軽装で現地入りしたのが甘かった。雪こそなかったものの、ミシガン湖から吹き付ける風が肌を突き刺し、体感温度は氷点下以下であったと思う。

その寒さにも負けず、空き時間を最大限に活用して、我々はシカゴ観光を堪能した。まずは早朝ホテルを抜け出し、ジョギングでミシガン湖畔へ。湖から昇る朝日の美しさは凍える寒さをも忘れさせるほどだった。ヘミングウェイも幼少のころ、この朝日を見たのであろうか。

シカゴ美術館の名画は、さらなる美で我々を迎えてくれた。普段は実験やら統計やらで乾きがちになる心を、潤してくれるように感じた。駆け足で回ることしかできな

ったが、スーラ、モネ、エル・グレコなどそうそうたる画家の名画を、いつまでも足を止めて眺めていたかった。

シカゴは食べ物も素晴らしい。食肉産業が盛んであったことから、市内には有名なステーキ・ハウスがいくつもある。ガイドブックが薦める一軒に入り、その味に舌鼓を打った。名物のディーブ・ディッシュ・ピザにも挑戦した。普通の薄いピザの数倍の厚みがあり、中には具材がたっぷり詰まっている。おいしいのだがそのボリュームには圧倒された。一切れでもう満腹であった。

心温まる光景にも出会った。市内の日本食レストランには、東日本大震災の被災者を応援する、「がんばれ日本、がんばれ東北」という看板が掲げられていた。たまたま見たミュージカルの舞台挨拶では、役者たちが日本への募金を呼び掛けていた。遠く離れた国からの厚情に胸を打たれた。

ここで文章を終えると、何をしに行ったのかをお叱りを受けそうなので、最後に発表について触れる。「既知語＋新出語」の組み合わせが、新出語の意味の定着と取り出しを促進する、という内容で発表を行った。質問が理解できなかったらどうしようかと心配だったが、私の拙い英語でも何とか切り抜けることができて安堵した。聴衆の中に、語彙研究等で著名なノッティンガム大学の **Norbert Schmitt** 教授がいらっしまった。発表後にわざわざ私のところまで来てくれて、論文を送ってくれと頼まれたことは望外の喜びであった。

このような予期せぬ出会いが、国際学会の醍醐味の1つなのであろう。普段はいつもこの方向性でいいのかと悩みながら、細々と研究を続けている。そんなささやかな研究でも、思い切って大きな舞台で挑戦することの大切さを教えられたように思う。

#### < 前号記事訂正 >

前号 JLTA Newsletter No. 30のp. 2において、2010年度開催の第14回 日本言語テスト学会 全国研究大会研究発表の冒頭囲い込み見出しの中の会場の記載に誤りがございました。「於：北海学園大学」は誤りです。「於：豊橋技術科学大学」に訂正しお詫び申し上げます。

#### < 編集後記 >

今号では、学会長による巻頭言、JLTA研究例会報告、海外の学会・研究会参加報告の執筆をお願いしました。ご執筆くださった先生方、ご快諾くださり誠にありがとうございました。

日本語テスト学会事務局  
〒389-0813 長野県千曲市若宮 758  
TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970  
e-mail: youichi@avis.ne.jp  
URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA>



#### 編集： 広報委員会

委員長 片桐一彦 (専修大学), 副委員長 齋藤英敏 (茨城大学)  
委員 秋山實 (東北大学大学院/株式会社 e ラーニングサービス),  
佐藤臨太郎 (奈良教育大学), 長沼君主 (東京外国語大学)